

住井すゑとその文学の里(十六)

牛久沼のほとり

牛久市文化財保護審議委員

栗原 くりはら

功 いさお



阿佐ヶ谷とその界隈には文士が住む

（阿佐ヶ谷文士村と呼ばれる）

大正14年（1925年）の5月に犬田一家が豊多摩郡杉並町大字成宗113番地（現杉並区成田東。前回の成宗は誤りである）へ移住した。

住井の長男章の語るところによれば、当時の杉並町の状況は次のようであった。

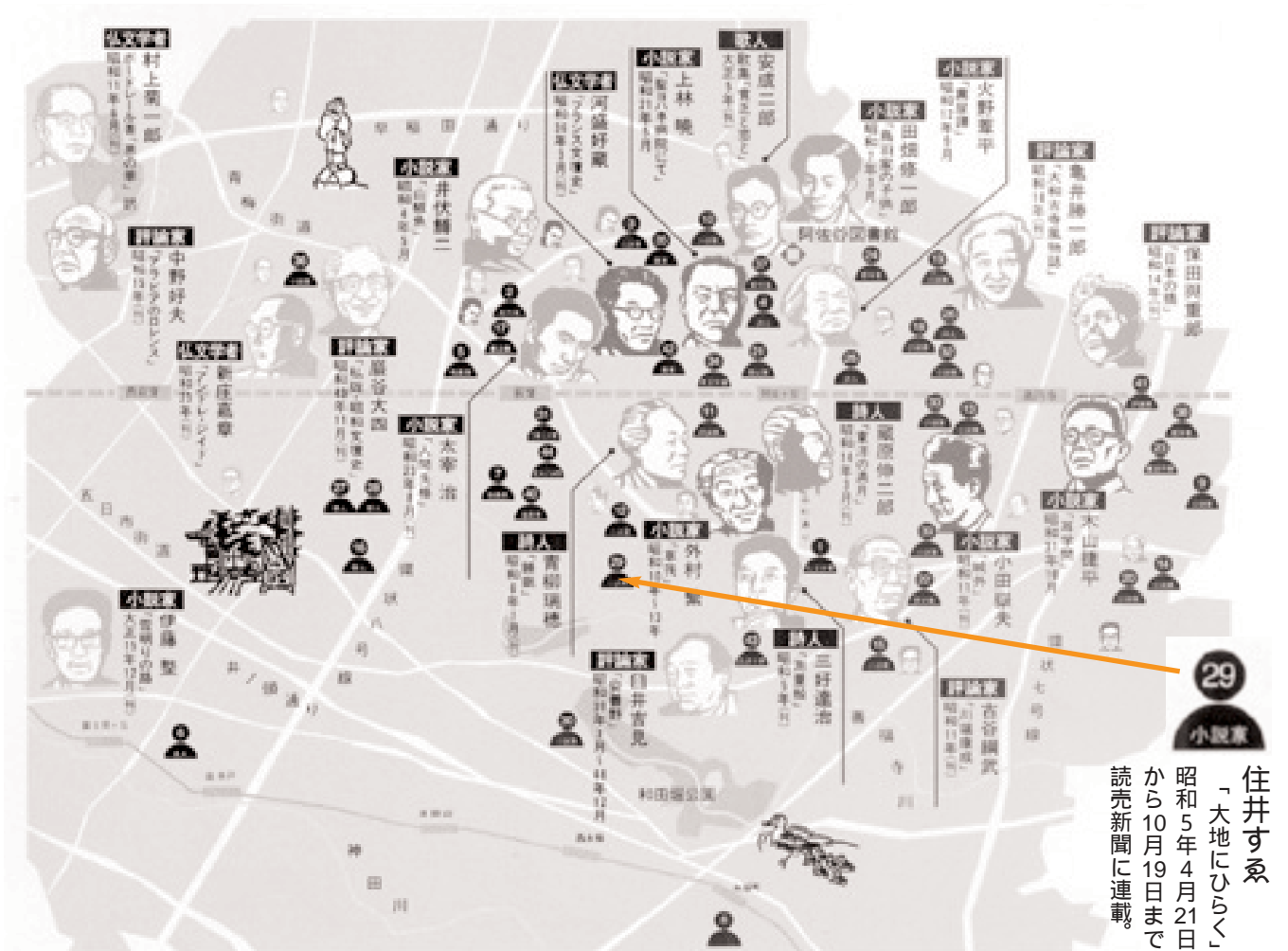
「駅から徒歩15分ぐらい離れた寓居付近は、田畑の中に家屋が点在し、小学校の級友も半数は地元の農家の子息、半数が借地・借家住いの子弟で、農家の飼いや牛が時折牛舎から道路に逃げ出して子どもたちを驚かせたり、夏休みの終りには田圃で蛭狩りができ、冬にはたこ揚げが盛んでした」（母・住井すゑの横顔、大和書房）。

杉並町の大字阿佐ヶ谷・大字成宗から井荻町の上・下荻窪界隈には、大正から昭和にかけて数多くの著名な文士が移り住んだ。彼ら文士は昭和4年（1929年）ごろ、「阿佐ヶ谷会」という交遊の会を設けて文芸誌を刊行するなど文壇に新風を巻き起こす運動を続けた。

杉並区では阿佐ヶ谷に図書館を開設して、阿佐ヶ谷ゆかりの文士の著作を集め、当時をしのぶとともに文士たちが住んでいた地域を「阿佐ヶ谷文士村」と呼んでいる。

阿佐ヶ谷文士村マップ

（提供：杉並区立阿佐ヶ谷図書館）



住井すゑ
「大地にひらく」
昭和5年4月21日
から10月19日まで
読売新聞に連載。